

Miss M. Nuno's excellent assistance in finding effective solvents of the thin layer chromatography.

* * * * *

日本産の *Parmelia* を検討していた初期の筆者は勿論 Nylander が同定した Vega コレクションの *Parmelia sublaevigata* Nyl. なるものは見ていなかった。然し諸種の文献殊に Nylander が *Lichenes Japoniae*, p. 27 に引用した *Flora*, 1885, p. 611 の末尾に……*P. tiliacea* Tuckerm. Exs. 70 est *P. sublaevigata* Nyl. とあるのをう呑にして以下 Tuckerman 標本 no. 70 と全く同一物で髓層中に所謂チョロギ形の菌絲の存在とアセトンエキスが o.T. で顆粒状の簇晶を生ずる標本をすべて *Parmelia sublaevigata* Nyl. と呼んだ。然し其の後 Culberson 君のペーパーが発表され、又 des Abbayes 教授から仏領ギアナ (type locality) 産の *P. sublaevigata* Nyl. の標本および Hale 君からタイプ標本と比較したというメキシコ産の *P. sublaevigata* Nyl. の標本を送られ、從来筆者が日本産の地衣で *Parmelia sublaevigata* と云ったものは *P. galbina* Ach. である事を確認した。*P. galbina* から抽出された (欧文テキスト参照) o.T. で黄色の顆粒を生ずる物質はサラチン酸やノルスチクン酸などに近似のデプシドーンであるらしく便宜の為にこれをガルビン酸と呼ぶことにする。材料の不足から分子式は未決定であるがクロマトグラフィーで一定のスポットを生ずるので確認できる。近頃 Helsinki 博物館に保存してある Vega コレクションの中の *Parmelia sublaevigata* Nyl. と称するものを実見することができた。この標本は no. 35116 *Parmelia sublaevigata* Nyl. Japonia. Rokkosan — E. Almquist. 1879. と記入され 2.5×2 cm 位の断片であるが明かに裂片の先端に近く粉芽があり無粉芽であるべき *Parmelia galbina* Ach. とは異り恐らく *Parm. metarevoluta* Asahina (本誌 35巻 87頁 1960) であると思う。この *P. metarevoluta* にもガルビン酸があることは欧文テキストにある。なお同時に北米産の *Parmelia obsessa* Ach. もガルビン酸を含有する事が判明した。

□直理俊次：写真集 第4巻、図版色刷 12 共 160、種数 88、解説 45 pp、写真 76. 1963. 第一法規出版社会社、¥3,000 既刊3冊と同様に見事な写真集である。ナニワズの実、オニヒヨウタンボク、ツチトリモチ、モッコクの実、ナンバンギセルなどの色刷図版など美しい。ホザキヤドリギ、ヒノキバヤドリギ、アサマヒゴタイ、オニヒヨウタンボクなどの写真はなかなか珍らしい。ヒサカキ、オヤブジラミ、カラスウリ、シユロなどは見なれたものだが、さて、それらの細部にわたる観察は一般になをざりがちであるが、直理氏が写真でとらえたものを見ると平素よく見ていないことがわかり、おかげで啓発されるところが少くない。レンズをこれだけ使いこなした氏の腕前もさることながら、またみなみならぬ努力には感心させられる。（久内清孝）